

新刊紹介

足立喜六著『大唐西域記の研究』を讀む

諏訪 義 讓

玄奘の大唐西域記が佛教學並びに東洋學の上から貴重なるものである事は茲に改めて言ふまでもない。而して其の研究は寧ろ西洋の學者によつて始められた。中にも Beal, Julien, Walters, Cunningham 四氏の業績は見逃し得ない。是れに次いで日本にも堀謙徳氏の解説西域記、京都帝大の西域記對校本が出た。後者は原文の嚴正なる定本を旨指したものであるが前者は解讀と共に研究を併せ載せて當時名聲を博したものである。この方面を専門とする者にとつては堀氏の解説は Walters 氏の學説を出づること少くさして是非の必要を感じなかつたが一般學者にとつては誠に便利なる解説圖書として渴望せられ絶版となつてより既に年

あり今は得難き稀觀本となつてゐる。

二

折しも此の度、足立喜六氏によつて『大唐西域記の研究』と題して大冊の上巻が刊行された。氏はかねて佛敎紀行の研究に精進せらるゝ篤學の老士で法顯傳大唐西域求法高僧傳等の考證を著はされた事は世の周知く知るところであらう。

本書の執筆は早くより洩れ傳へ又氏よりも直接に堀謙徳氏とは異つた方面より推し進めたいと聞いてゐた。今や新刊を手にするに及んで聞いて見るに『大唐西域記の原義を簡明正確に直解して特にその地理的關係を考へ以て玄奘の旅行の真相を闡明しよう』(p. 7)と企てられた事を了解し得る。先づ原文に句讀を施し難解の言語には欄外に注釋を爲し更らに和譯を連ねてそれに解説意見を附してをらるゝ。従つて氏の重點を置かれたのは解譯と地理的考證であつて中にも玄奘の距離里程の研究、方向の解釋、地名の還元及び比定等は意を留むべきものであらう。玄奘の里程が唐の小程であり (p. 22) 天山を横斷した凌山が Bedal Pass

でなくして Muzant Pass であり (p. 35) 觀貨選の故國が二十七國であつた (p. 62) こと等は特に氏の主張せらるゝところである。

三

未だ下巻の上梓を見ない以前に立ち入つた批評は差控へるべきであらう。が概観して氣付いた點を三つ告白するのを許されたい。

第一は比較的に他の關係漢籍地書が引用されてゐない。例へば昭怙釐伽藍が雀離浮圖と音韻的に聯絡あり (p. 11) とするならば洛陽伽藍記を、迦濕彌羅の四門に就いては (p. 256) 悟空記を、三道の寶階に關しては (p. 33) 慧超傳を、尠くも代表的な記述として参照すべきであらう。第二は既に發表されてゐる學術論文又は學説が顧られてゐない。單に『胡は北方の野蠻』とのみ稱したり (p. 4) 鉢露羅國を直ちに Kapala と決したり (p. 233) 『童受の撰著に就いては明かでない』と退けたり (p. 240) 爲すべきでなからう更らに大は佛滅年代 (p. 486) より小は竺筏 (p. 241) 等に至るまで著名となれる學

説位は出してほしかつた。

第三は地名の考證に當つて相當の無理がある。氏は序説の中に『大唐西域記中の殆んど總べての地名は悉く現在の地圖上にその緣故を求め得らるゝ』と稱してをらるゝが果して眞實であらうか。其處に掲げてをらるゝものを眺めても直ちに背れないものがある。或は巴利語或は土耳古語或は音譯或は意譯と説明すれば何づれかに解き得るかも知れぬ。時には土耳語を以てし時には波斯語を以てし時には西藏語を以てする。甚しきは一の地名を波斯語と梵語と合成して説く(D. III)が如き強ち妥當なる方法とは言ひ得ない。Watsons 氏にもその弊害がないのではないが地名の還元及び比定に餘り急であつてはならぬ。勿論種々の言葉で解釋しなければならぬが時代的地域的民族的關係を充分考慮に入れて爲すべきであらう。今や『沙彌』の一語にしても梵語の Śra Maṇera よりも龜茲語の Samir か A 來々 (M. Svirain Lero; Tekharien B, p. 71) とか(言はる時代となつてゐる)。

以上は本書の重點から見ても少しく望蜀の感があるであらうが已に『大唐西域記の研究』と名付られ更らに西域記の研究はそれ位まで水準を昇してゐると思ふからに他ならぬ。

四

假令、前述の諸點を退くとしても原文を本書の基本的要素とするならば西域記を進奏したる上表文や敬播等の序文を前に附して一應は解讀する補助と爲してほしかつた。そして又玄奘の全生涯に及ばずとも入竺求法の往返事實が論述されてゐたとすれば實に申分なかつた。玄奘は一般に貞觀三年(629 A. D.)二十八國禁を犯して遁るが如く出發したと稱せらるゝが必ずしも異説がない譯でない。併し乍ら願れば西域記の本文の解讀は是れ以上懇切明快なるは蓋し望み得ないであらう。と同時に地理的考證に於ては格段の進展を爲したる事を認めねばならぬ。裨益せらるゝもの豈に吾人のみではない從來の親交幸にして極言を赦し給はむことを。(二五〇二・二一〇)

野尻重雄氏

「農民離村の實證的研究」

我が國の農村人口が戦時下、實に重大なる意義を有してゐることは周知の如くである。即ち農村人口が直接國軍の、又廣く國防力の一大基源としてはもとより、工業部門、特に近時著しき發展を遂げつゝある重工業部門への人的資源として、更には食糧増産の原動力たる農家勞働力自體として刻下其の果すべき任務は極めて重要且つ緊急なるものがある。更に我々が一度國家の長き將來の發展、興隆に思を致す時、農村人口が廣義に於ける民族力(健全なる民族人口と民族協同體を中軸とせる)と密接不可分離なる聯關を有すると云ふ事實に、直面せざるを得ないであらう。

翻つて我が農村の現實を全體的に、又は部分的に窺ふ時、其の諸般の狀態は必ずしもかかる農村人口の重要任務を遂行するに適してゐるとは考へられない。否むしろ相當深刻なる二律背反的とも稱せ